

# なな山だより

なな山緑地の会会報 第19号 2010・4

## なな山の思い出

多摩市立第二小学校 おやじの会 山中太一

昨年の12月に多摩第二小学校の子どもたちが「なな山緑地の会」の皆さんにお世話になりました。ありがとうございました。

多摩二小のおやじの会が主催して2回目、今回の参加者は前回は上回り、大人も入れて120名近い大イベントになりました。

午前中、子どもたちは、準備して頂いた、木工作や鳥の巣箱作り、丸太切りなどを中心に体験させていただきましたがよくここまで集中できるなと感心するほど真剣な顔つきでした。

子どもたちの思い思いの作品は、ボスカやスプレーで彩られて大事なお土産になったことは言うまでもありません。

また、この目的で参加する子も多い大好評のカブトムシの幼虫採り、ハシゴ登り体験、落ち葉掻きなど普段できないことを、たくさん体験することができました。

特に落ち葉掻きのときのこと、子どもたちがプラスチック製の箕(み)をソリ代わりに使って、山の斜面を滑る遊びを始めたとき、私が、「あの箕に乗ってしまって、大丈夫ですか。壊してしまいそうですが。」と会の方に言ったところ、「いやあ、最初からああやって乗って遊ぶのではないかと持ってきたものです。やっぱり子どもたちは気づいて遊び始めましたね。」と楽しそうに見守ってくれていたことが本当に印象に残っています。子どもたちを見守る大切さを学んだような気がしました。



よく、今の子どもたちはなかなか外遊びをしないとか、ゲームばかりだとか言いますが、なな山に来ている子どもたちを見ていると、環境さえあれば自分でどんどん考えて遊べるのだなと実感しました。自分たちの学校から歩いていける距離に、このように里山の自然を体験できる場所があるということは、本当にありがたいことかもしれません。

里山は、人の手が入らなくなると荒れてしまうと聞いておりますが、ここまで手を入れて里山を再生してこられ、また、開放してくださる、なな山緑地の会の皆さんに本当に感謝しております。また来年もぜひよろしくお願いいたします。  
<写真> 上 = 落ち葉掻きに熱中する子どもたち 下 = 宝さがしに参加する子どもたち

## 「なな山緑地の会」の総会が開催されました

3月28日(日)9:30から、百草団地集会場で「なな山緑地の会」の2009年度総会が開催されました。

出席19名、委任状14名で総会成立。議長に隅田さんを選出し、議事に入りました。2009年度活動報告、会計報告、役員改選、2010年度活動計画、収支予算などが異議なく了承されました。

質疑応答では活発な議論があり、10:45、無事終了しました。

<写真> = 総会の様子



## はじめに

最近、多摩の里山と生き物たちの話をする機会をいただきました。その時大筋を頭に描き、思いつくままに20分の持ち時間内で話したのですが、全く話しかれず、まとまりのないものとなってしまいました。そこで、話した内容を少し整理して、言い足りなかったことを大幅に付け加えてまとめておきたいという思いが募り、ここに紙面をお借りして述べさせていただきたいと思います。

気のつくまま、蓄積された知識と体験のなかから培われた思いを綴っていこうと思います。思い違い、誤解があるかもしれませんが、恐れず、驕らず書き進めますので、その辺りご容赦ください。

## 里山とは

人の住む集落がある。小川の流れがある。谷戸には水田が伸び、集落から少し小高い場所へと畑が広がる。その先には雑木林があり、山が続く。この、人と自然が織りなす一帯を広く里山と言っています。この意味での里山が一般に言われたしてから50年と経っていません。最近では畑地、田圃、居住地域とは別に里地という言い方も出てきています。里地里山文化論などと使われています。その場合、里山は里地に続く雑木林、山地を指しています。



人の暮らしと自然の生態系は深い関わりを持ちながら歴史を刻んできました。山から湧き、流れ来る川の水は、豊富な養分をもたらす、水中の生物を育て水草や魚類を育みます。水田を潤し、稲を育てます。飲料をはじめとした生活の水となります。雑木林は人の暮らしに不可欠な熱源として薪炭の生産林となり、落葉は貴重な堆肥となります。山菜、キノコの収穫は人の食材となり、刈られた草は家畜の飼料となります。樹木は伐採され、建築材、家具材、道具材としても広く活用されました。

樹木が伐採された後は、自然の萌芽によってか、或いは人が苗木を植えて森や林を更新していきます。持続可能な環境づくりの原型がここにあり、里山が脚光を浴びる所以でしょう。

## 多摩の里山の今

1960年代に入ると、石油・石炭・天然ガスが燃料のほとんどを占めるようになりました。農作物も化学肥料を使うようになり、木材も外国産に依存するようになりました。こうなると雑木林が生活林の役目が終わって手入れされずに放置され始めました。高齢化と人手不足もそれに追い討ちをかけたのです。都市の人口の急激な増加の予測から、大規模な宅地開発(ニュータウンの建設)の大工事が始まったのもほとんど期を一にしています。これにより、多摩の里山はその8割を失ってしまいました。アニメーション映画「平成狸合戦ポンポコ」ではその経過を土地のタヌキの暮らしを通し、壮絶な戦いとして見事に描いています。そして、残り少なくなった雑木林も相続税対策で売却されたり、物納された後、競売され、次々に宅地開発の業者に渡り宅地化していったのです。

今、雑木林は、開発を免れた斜面地に点々と、そして隣接市境にわずかに残っているだけとなりました。行政が公園としてあらかじめ確保した部分と、緑の保全区域として網をかけ、少しずつ買収したものです。そういう雑木林を保全・育成すべく、市の呼びかけに応じる形で、いくつかの市民ボランティアグループが立ち上がり、汗を流す活動を続けているのが現状です。

## 多摩の里山の生態

この辺りでいう雑木林は、コナラ、クヌギを中心とした落葉広葉樹林ですが、その成り立ちに少し触れておきましょう。

潜在自然植生という言葉があります。文字通りその土地が本来備えている自然の植生があるということです。関東南部はシイ・カシ・タブなどがそれに当たるといわれています。古い神社やお寺の森(いわゆる鎮守の森)にその植生が残っているのが良く見られます。子どもの頃、木登り、セミ捕り、かくれんぼなどで遊んだ場所としてなつかしい思い出を持たれる方も多いと思います。

江戸時代中期にこの武蔵野地方には急激な人口増加が見られ、燃料や肥料・食料の需要が高まり、有用で効率よく再生産できる落葉広葉樹(クヌギ・コナラ類)の森に作り変えられていったということです。

現在残る雑木林の原型が生まれていったのです。薪・炭に適し、15年前後で伐採しては萌芽更新できるという優れた再生力の強い樹種を選びすぐってきた人の英知でありましょう。これが私たちがイメージする雑木林となっています。多摩地区では戦後大量の復興資材としてほとんどの樹木が伐採され、当時、禿山と呼ばれるような灌木の森や林となってしまった時期がありました。落葉広葉樹は萌芽し、10年もすれば若返った雑木林になるのですが、木材の早期利用を考えて、



日当りの良い禿山はアカマツ・クロマツの成育に適していたため、大量に植樹されて各所に松林の出現を見たのです。同時に奥山には、拡大造林と言って自然植生を皆伐し、スギやヒノキの一斉林を作っていたのですが、こういうことがあったことを述べるに留めます。

その松林が先に見た事情で放置され始めて4、50年が経ちました。落葉広葉樹は日光を求めて上へ上へと伸び、毎年堆積する落葉が肥沃な土壌を作ることになりました。そうすると、潜在的な植生のシイ・カシ・ヒサカキや日陰に強いアオキ・ヤツデ・カクレミノが勢いよく生育しはじめました。やせ地で日当たりの良い土地を好むマツはそれらの植生に圧倒され勢いをそがれていき、そこへ松枯れ虫(マツノザイセンチュウ)の侵入に見舞われて次々と姿を消していったのです。手入れのされていない雑木林には多くのマツの枯木が倒れています。そして現在に至ってはマツは数えるほどしか残っていません。(つづく)

<写真>2ページ = 整備された西の山、3ページ = マツが沢山倒れていた整備前の中の山

## 広げよう会員の和

リレー随筆(19)

わが家のベランダ菜園

松本 学

わが家はなな山緑地の一角に面してしまて30年来のお付き合いを続けています。

コンテナ(プランター)栽培といえばシャレて聞こえますが、発泡スチロールのトロ箱と植木鉢での栽培で、自称「ママゴトミニ菜園」と呼んでいます。培養土は赤玉土(中粒)を底一面に敷き、その上に赤玉土(小粒)と腐葉土・若干の堆肥を加え、元肥として有機質肥料を混ぜ込み、化成肥料を追肥として施します。

春蒔きはコマツナ・チンゲンサイ・ミズナ・シュンギク・ホーレンソウ・ダイコン・カブ・ニンジン・リーフレタス・チマサンチュウなどなど。出来具合はダイコンで茎4~5cmで長さ10~15cm、カブは2~3cm、ニンジンにいたってはペンシルサイズ(ワイフ曰く鉛筆ニンジン)です。



ミニ菜園だから収穫物もミニサイズかなと納得しています。スーパーの100円野菜に比べると、わが家の野菜の出来具合はコスト的には1,000円野菜で、売値は10円野菜かなと自嘲気味。春は害虫の生存環境が段々良くなるため、アブラ虫、イモ虫、アオ虫、ヨトウ虫などが大活躍、コマツナ・ダイコン・カブ・チンゲンサイなどはその葉脈のみ残して丸裸、まるでヤブレ傘同然です。食うか、食われるか、害虫と人間のサバイバルゲームです。自家製薬剤としてアルコール度47%のジンにトウガラシ・木酢・硼酸を溶かした溶液を散布、あるいは牛乳をスプレーするも、人に優しい薬剤は、害虫にも優しいのか効果はサッパリというのが実情です。

夏野菜はミニトマトを主として、ピーマン・オクラ・トウガラシなどを植木鉢で栽培、ミニトマトはそのワキ芽をサシ芽にして秋まで収穫しています。病害の多いキュウリはこちらから敬遠しています。ゴーヤ・インゲンと同様に、軒先のネットにつるを這わせる支柱仕立てのサツマイモもバッチリ収穫が有りました。

秋蒔きは、春蒔きの種類にタカナ・カツオナを加え、カツオナは正月の博多雑煮に入れて故郷の味を懐かしんでいます。害虫の勢いが弱まる分、出来は多少良いようです。周年栽培のカイワレダイコンの他にミツバ・セリ・ニラも食卓を潤しています。皆さんも、プランターでの家庭菜園はいかがですか？

さて、次は入会間もないフレッシュマン、お元気な小野塚さんをお願いします。どうぞよろしく。

### 2010・1・10(日)晴れ 気温9

新年の神事で安全祈願。なな山だより18号配布。 参加者19人。  
 「作業」今年一年の作業の無事を祈願してご神木にお神酒をまく(写真右上)。落葉集め、堆肥を運び畑に敷き込む、西の谷の草刈り。  
 「観察」見つけた植物 = コナラの芽(春の予感！)。



### 2010・1・24(日)晴れ 気温12



日なたはポカポカで良い一日  
 参加者15人。

「作業」西の山の下草刈り、中の山の公園付近の整理(常緑樹の伐倒、草刈り)、境界確認、植物の名札作り、マキ割り。  
 「観察」見つけた植物 = ホトケノザ、オオイヌフグリ、タンポポ。

### 2010・2・14(日)晴れ 気温7

空気は冷たいけれど快晴 タヌキも出て来た！ 参加者19人。

「作業」東の山の笹を一尋の幅に刈り、作業の道作り、取り掛かる前の作戦会議？(写真左上)、中の山と公園付近の間伐・整理・片付け、畑のキャベツの苗補植・ヒヨドリ除けの覆いをする、スギの枝打ち、中の谷の落葉集め。  
 「観察」見つけた動・植物 = スギの雄花・雌花、ヒノキの雌花。 会長の家にタヌキの子ども2匹が現れた。前回の活動時も見つかった者あり。中の山に巣があるらしい。

### 2010・3・14(日)晴れ 気温9

シイタケ大豊作！植物が芽吹き、花が咲く、シイタケも沢山出て春の訪れ 参加者15人。

「作業」シイタケ収穫(写真左下)、今年は大豊作！昼、きのこ汁 & 焼きシイタケに舌鼓。畑にジャガイモ(キタアカリ・メイクイン)の植え付け、キャベツの覆いが取れていたなので覆い直し、住民から危険だから、切って欲しいと依頼された、大きなコナラ3本をチルホールを使って伐倒、材はホダ木になるように整理。



「観察」見つけた花 = コブシ、アセビ、ヒラギナンテン、ヒサカキ、カンスゲ、タチツボスミレ、シュンラン、ホウチャクソウの芽  
 春の訪れを告げる花たちがなな山を彩り始めた。

### 2010・3・28(日)晴れ 気温9

2009年度総会無事終了、大風でリヤカー置場の屋根が飛び、木が倒れるなど被害あり、片付け作業を行う。 参加者8人。

「作業」リヤカー置場の屋根修理、傾いた木の伐倒、倒木片付け、落ち枝集め、道路沿いの清掃・片付け。

「観察」見つけた花 = キブシ(写真右下)、クマシデの雄花、モミジイチゴ、スミレ、ヒゴスミレ、ヤマブキのツボミ、山は春真っ盛り！



なな山だより 第19号  
 発行 行  
 発行責任者  
 住所  
 ホームページ  
 編集委員

2010年4月11日発行  
 なな山緑地の会  
 高木直樹  
 多摩市和田 1394 13  
 http://www.geocities.jp/nanayamaryokuchi/  
 鎌田文雄・中原君代・戸谷恵麻

#### 編集後記

なな山つれづれ草は都合により休載します。相田さんがエコフェスタ2010で講演した「多摩の里山」の内容を文章にまとめられたので今号から連載します。新年度を迎え小誌も新たな気持ちでスタートとします。よろしくお願ひします。K